西合志町保健福祉センター

くまもとアートポリス事業参加作品

今村雅樹

ホール内観

地域施設として

この建築は，福祉系の施設が地域施設と一体となった21世紀型の日常的なコミュニティコンプレックスである。

「デイセンター，保健センター，子供センター，福祉支援センター，地域交流ホール」の５部門が一つの空間の中で有機的に繋がり，多世代の様々な人々の交流が自然に行われるように，空間を流動的に繋げ，ゾーンを形成するように計画している。

地方に建つ地域施設は，車によるアプローチがほとんどであるため，ここでは利用目的によるアプローチを大きく２つに分け，動線の混乱をなくすように計画している。その２つというのは，自分で車を運転して来る人とケアが必要で送迎される人に分けている。館内は高齢の利用者にも分かりやすいように，案内サインも大きくグラフィックとしてデザインしている。休んだり話したり疲れたときには寝ころんだりできるようにいろんな形のベンチをゾーンの合流・分節点に設け，廊下がリビング的なホールとなるようにしつらえている。

明るく気持ちの良い空間が住民の「たまり場」となるように，福祉や住民の関係代表者と検討委員会を構成し，意見をワークショップで取り入れ，勉強会を重ねながら計画された。細長いZ形の敷地をいっぱいに使いながら，北から南へ向けて利用者の活動の軽いものから重いもの（介護が必要なもの）へと，グラデュエーションゾーニングを行っている。

開きながら閉じる／トラベリングからドリフティングへ

以前設計した「太田市総合ふれあいセンター」（1999竣工）では，地域住民の交流を図るために，空間を「開いていくこと」を中心に計画し，施設に直接目的がない人も「通り抜け」することで情報を得られるようなスピード感のある「トラベリング」という概念をデザインに採り入れた。

しかし，今回は福祉系の目的性が強い人達が利用する施設となっている為，そのような中でもスローな河の流れのようなアクティビティを「ドリフティング（漂わせる）」と言う解釈のもとに，空間化を試みている。

インテリアは，「太田総合ふれあいセンター」の時に多用されたガラスの間仕切り壁や「見る見られる」の開放型しつらえとは異なり，厚いコンクリートの壁が中心となりそれぞれのプライバシーを守りながらも，どこか外部と繋がる「開きながら閉じる」「閉じながら開く」手法を採り入れている。

各ゾーンを緩やかに繋いでいるのは，子供と地域住民交流の「あそび庭」，竹を配しボランティアや保健介護の人達の憩いの場としての「光庭」，デイケアを利用する老人達の緩やかな動きのための「デッキ庭」の３つの中庭であり，様々な人のスローなシーンを誘発するように計画している。

分断されながらも連続する構成体

建築は敷地形状いっぱいに建てた平屋（バリアフリーを重視）のため，田園地帯にぽつんと建つ建築にしては，内部空間から創り出されたデザインとなっている。

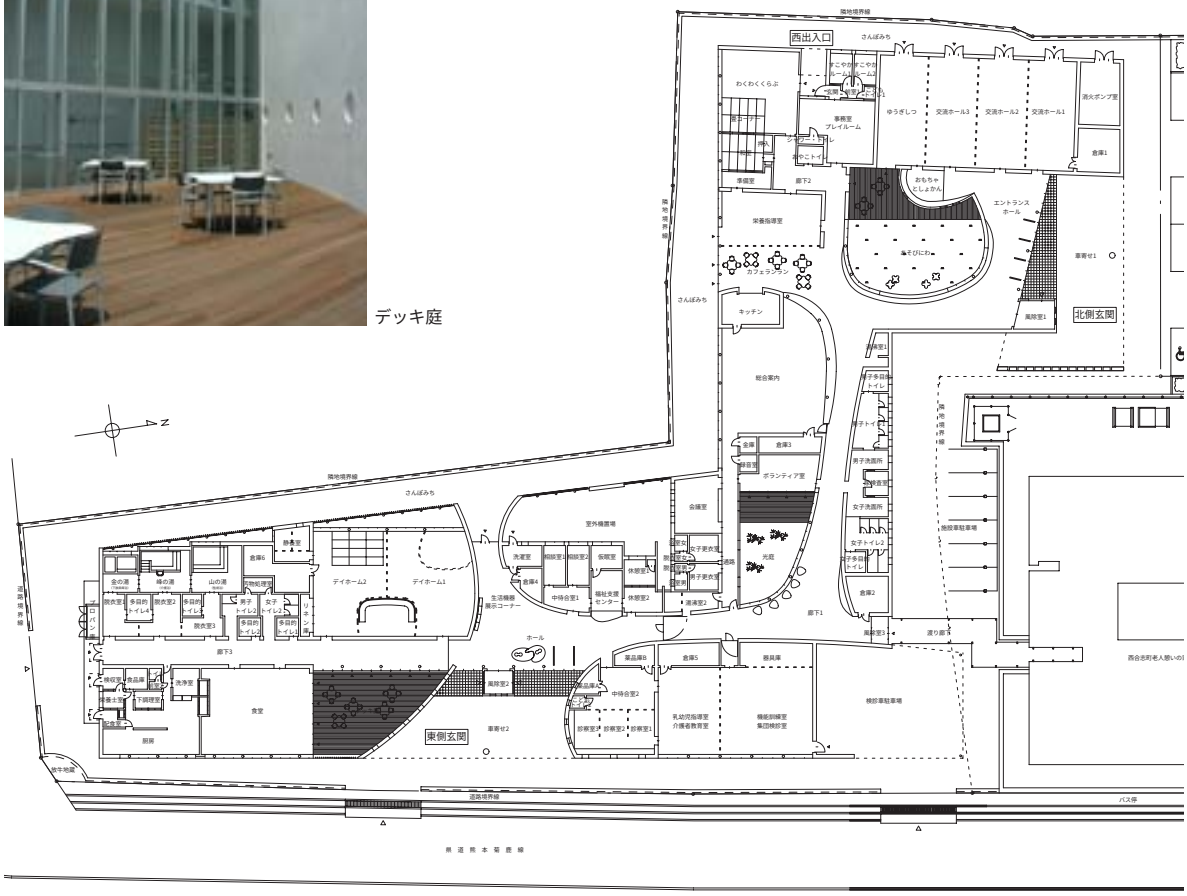
湾曲した壁は，各ゾーンとパブリックスペースを細胞膜のように有機的に内と外を結ぶ役割を果たし「ドリフティング」を可能にする。またこの内部の道空間は，広がったり狭まったりして空間の前後のシークエンスを創り出し，熊本城の城壁の間を歩いているような「切り通し」的な空間と相まって，様々な方向から入ってくる光に導かれながら無意識に外部に繋がった５つのエントランスを結ぶ動きを誘発するように設計している。

立面形も内部を同じように各ゾーンの開き方により作られる「分断されながらも連続」している壁によって構成され，各面によって全く違った表情を作りだしている。

（いまむらまさき・助教授）

西合志町保健福祉センター「ふれあい館」
設　　計／今村雅樹アーキテクツ・田尻設計　設計共同体
構　　造／TIS & PARTNERS
敷地面積／5,447.94m^2
建築面積／3,385.84m^2
延床面積／3,057.95m^2
階　　数／地上１階
構　　造／鉄筋コンクリート造（耐震壁付ラーメン構造）
工　　期／2001年７月～2002年４月

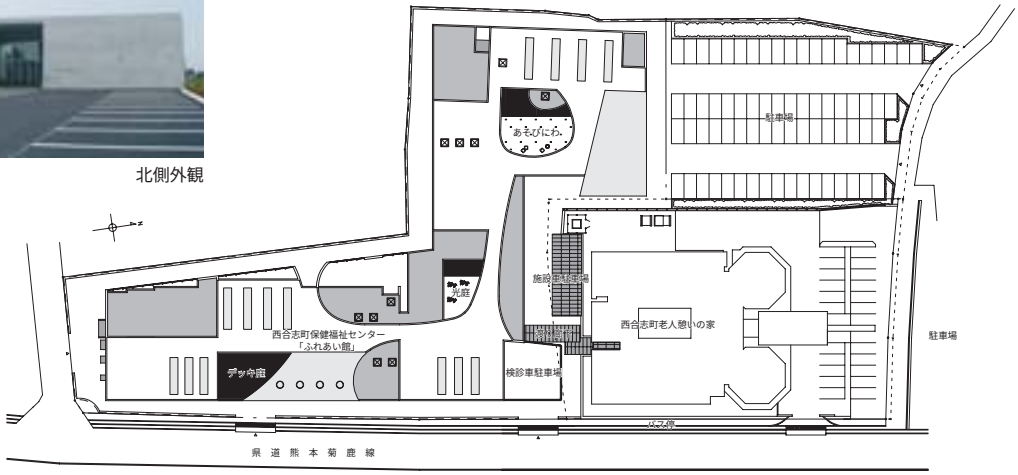
デッキ庭



平面図　1／800

断面図　1／800

北側外観



配置図　1／1500